



1991年 木村東道撮影

●西安城内のほぼ中央にある鐘樓

明代にこの場所に建てられて時を告げていた。西安は昔、唐代の都・長安で、当時世界第一の大都会であった。今の西安は唐の長安の六分の一しかないが、それでも大都市で、鐘樓は西安のシンボルといえる。

自分の字

書道は、習字によって取り敢えず上達する。だが、この習字は、小さい範囲での上達であり、自分の書道を大きく発展させることはできない。とはいえ、この習字を中断してしまえば、もう書道は成り立たない。

字を習う目的は『自分の字』が上手になることに外ならない。「他人の字」ではなく『自分の字』が——である。この簡単なことを忘れている人が実に多い。

臨書においても例外ではない。王羲之の『十七帖』を臨書するということは、いかに上手に、あるいは、いかに『十七帖』に似せて書けるかが問題なのではない。王羲之の『十七帖』を臨書することによって、自分の字が上手になることが重要なのである。習字の結果、草書を書く技術を修得し、自分の草書がさらに上達したならば、目的は十分に達成されたと考えてよい。もう、王羲之の草書に似せて書く必要はないのである。「だが——」である。習字の過程においては、やはり似るように習うべきである。何故なら似せて習うことが習字なのだから。

このように考えれば、原本の碑帖の見えにくいところの処理も簡単である。模書したものは、王羲之が失^し錯^しした箇所まで丁寧に塗りたくっているのを見るが、書聖といえども人間、人間であれば間違いはつきものである。他人の間違いを真似るほど愚かなことはない。『本膳』という落語があるが、これを地で行って物笑いの種にならないように、心して習いたいものである。

